

転 → 展 → 天職

○り道をして
つかんだ
働く充実感

Number 26

Photo by Toshiaki Usami

自ら選んだ「生と死を見つめる仕事」

東京・山谷。一泊二二〇〇円の簡易宿泊所が密集する日雇い労働者の町に、昨年一〇月、在宅ホスピスケア施設「きぼうのいえ」が完成した。

路上生活のすえ、病気で社会復帰の道を絶たれた人や末期ガン患者など二人を収容している。施設長の夫や往診に来る医師、スタッフらとともにここで働く山本美恵さんは、元看護師であり、医療専門誌の編集者でもあった。

高校時代に「恵まれない人のために仕事が見たい」と言いながら亡くなった親友の影響を受け、看護師に勤めていた病院の機関誌を編集したのがきっかけで、出版に興味を抱いた。当時、山本



Case file 26 Mie Yamamoto

さんには長年付き合っていた恋人がいて、ある事情から仕事を辞め駆け落ちしようとした。しかし、失敗。仕事も失い、新しいことに挑戦したいと出版社に入社。恋人への思いを断ち切るために無我夢中で働き、上司から一目置かれる存在になった。そんなとき、恋人が事故死するという衝撃的な出来事に遭遇する。

「世の中にこんなに苦しいことがあるのか」と思いました。そして、人は死んだらどうなるのか、死を受け入れるとはどういうことなのかを考え続けました」翌年、ホスピス・ボランティアを学ぶ大学の社会人講座を受講。そこで夫になる雅基さんに出会い、「ホームレスの人びとに人生の最期をできるだけよい環境で迎えてほしい」という夢と一緒に追うことになった。

資 金の当てもないまま、結婚三日目に二人で山谷に出かけ、ホスピスを建てるのにちょうどよい土地を見つけた。二億円近い物件だった。周囲に協力を求めたところ、支援したいという発起人が集まってくれ、銀行からの融資も受けられた。そして、わずか九カ月で奇跡的にオープンにこぎ着けた。

在宅ケアの集合体という意味で「在宅ホスピスケア施設」と名付けた。共同生活になじみず食事を投げ飛ばしたり、入居費を使い込め人もいる一方、ここで安らかな死を迎えた人もいる。区から支給される生活保護費から入居者に必要経費を出してもらい、運営と借金返済などに充てているが、毎月赤字。不足分は寄付に頼らざるをえないが、なんとかなると信じる毎日だ。病院にいた頃、人の死は心電図上の無機質なものでしたが、ここでは体に管を付けることもなく、人間らしく自然に息を引き取る。「痛みを取る以外、延命治療は行ないません。入居者は家族と同じ。最期まで尊厳のある日々を送ってほしい。いつか、ここに来る人みんなが幸せな気持ちになつてくれたら」

年収
前職
750万円
↓
現職
120万円

職業
医療関連出版社の
編集者

在宅ホスピスケア施設・看護主任

1958	長野県生まれ	に入所	
1980	東京都立豊島看護専門学校卒業、心臓血管研究所附属病院に入所	1994	メチカルフレンド社に入社
		2001	退社
		2002	「きぼうのいえ」をオープン
1983	新赤坂クリニック		

実働時間

出版社時代は朝9時～夜12時頃まで。現在は朝9時～夜9時頃まで

名前

山本美恵さん(45歳)